

昔昔 ちっとも雨が降らなかった・・・人も獣も」ではじまる影絵「七つの星」。夕涼み会の夜の影絵が現実のように、猛暑が続いており、更にこれからも続きそうです。九州山陰山陽地方の豪雨災害、そして異常な高温続き、など何か自然からの警鐘が鳴り響いてきているような毎日です。私たちの暮らしに、何か謙虚なことを求めているように感ぜずにはられません。

そんな日々の中、あっという間に、夏休み、1学期が終了です。梅雨をほとんど記憶にないままに夏に突入した感じ。田植えを終え、稲の成長を見守り、文庫祭りを楽しみ、ひたすら農業や散歩、泥遊び、流しそうめんまで過ごし、仕上げは、夕涼み会。特に、オペレッタなどの夕涼み会準備は全くなかったのに、保護者の皆さんの熱い汗の日々の賜のお陰で、子どもたちも熱い夏を共に過ごす事ができました。

その夕涼み会も、お天気心配なく、そして酷暑の影響もなく、大地の木陰や夕暮れの涼しさの中で、ゆったりとした時間を感じながら、穏やかな縁日、絵本の世界の広がりの中で味わい、絵本を読んでもらっている光景は、素晴らしいひとときでした。夕日に輝く舞台でのオペレッタ、まさに、ここは自然の中の「劇団四季か宝塚か」といった感じ。物音一つしない暗闇と静けさの中での影絵、もちろん観客も物音一つ立てずに見入っていた「七つの星」影絵。そして、父親達のトーチング・年長児母親の舞、ギターと太鼓の「イマジン」 願いを乗せて天に向かっていった七夕飾り、満点の星空と暗闇の中を続いた行灯行列、そして蛍たちの輝き。その頃には、肌寒く感じるほどの夜の冷気が漂いました。まさに、夏の夜、忘れられた自分の子ども時代の一コマが、随所に感じる事ができた夜でした。

「夏が来れば思い出す・・・」と歌があるように、夏が来ればあの大地の夕涼み会の一コマが思い出される子どもたちに成長してくれたらうれしいなあと感じます。夏休み、更に家族の一コマを重ねてください。



## 【陸前高田市】

「ようやく海開きしました！！」と陸前高田市小友小学校の校長先生が口を開きました。遅い海開きだなあと思っていたところ、それは6年ぶり、震災後初めての海開きという事でした。震災の津波、海の恐怖から、ようやく開放されつつあったという状況だそうです。

その小友小学校への「お話」を東京子ども図書館の松岡先生達と一緒に届けてきました。大地の里山と同じ田園里山風景が広がり、水田は緑にそまり、稲が元気に育っています。そんな小友小学校の砂利の駐車場を下りると、校舎の一階部分の上部に「津波水位」とあり、ここまで埋まったということが一目でわかりました。隣には、真新しいプールがありました。校舎敷地内の建物、ここまでの車道の新旧のアンバランス感が、震災の爪痕を感じさせてくれました。

この学校の子どもたち、新一年生は、震災の時に生まれた子どもたち、6年生は、新一年生の時に入学した子どもたち、そんな子どもたちは皆、身内や親戚友人関係者を亡くした悲しみを持っているそうです。そんな子どもたちは、全員 目が輝き、素直でした。まるで、ネパールなどの子どもたちを見ているようでした。生きる熱気、意欲、エネルギーの中に、素直、無垢、純朴を感じ、お話への反応も、凄いいものでした。「小友小学校の子どもたちは、本当によくお話を楽しむ」という話は噂通りでした。それは、もちろん、この子どもたちの素晴らしさに加え、震災以来、毎年、年3回、東京子ども図書館の松岡先生達が、継続してエネルギーギッシュにお話を届けてこられた賜だと感じました。やはり、その願い、祈り、思いは、確実に伝わり、実を結んで行くものだ痛感しました。そんな仲間に、一時でも加えていただき感謝でした、

私たちが泊まった陸前高田市の唯一のホテルは、まさに被害の中心地でした。このホテルの窓からの海を見る光景は、まだ一つも建物はなく、見えるのは、大型トラックと大型ショベルカーの行き交う光景と復興現場だけでした。新しくできた市立図書館も訪問しました。児童コーナーもとても充実しており、その空間は、やはり、未来の子どもたちに思いをかけているということを感じました。その図書館のもう一つの出口、つまりトイレに行こうとすると、そこはもう違う世界、ショッピングセンターでした。つまりショッピングセンター（スーパーマーケットやドラッグストアやコンビニや飲食店などの複合施設）の中に図書館があるのです。買い物をしながら図書館を楽しむという発想もあります。

というよりも、限られた復興現場スペースに、全て流されてしまった街を集中して集めて復興している、よって、このエリアには、ショッピングモールや図書館、公園などもコンパクトにまとめて、エネルギーが集まる広場 空間にしているのでしょうか。夕食後の9時頃、このエリアを再訪すると、公園広場には、露天が開き、若者達が浴衣姿で集まっていたり、熱気溢れる空間となっていました。「こうした世界が広がっただけでもうれしい」と皆感じていました。

そういえば、街全体の人達の雰囲気や対応は、皆やさしく親切でした。苦難や苦勞、大変さを乗り越えてきた人達の持つ、大きさを感じました。都会のような洗練されたマニュアルっぽいものはなく、たまたま入った復興地にぼつんと立つコンビニの接客も、マニュアルではない、昔の商店街の小さなお店という感じで、顔見知りの人達が集うという感じでした。人全体の暮らしの一体感を感じた一日でした。

何とか責務のお話を果たしてから、「小さいおうち」というトレーラーハウス図書館に向かいました。青ちゃんが、東京子ども図書館のお話の研修に行っていた時に、お手伝いさせていただいた図書館です。市立図書館開館に伴い、その役割を終えたのですが、その素晴らしい蔵書と室内環境と活動のお陰で、ボランティアによる存続が決まり、いままで通り、ここでまだまだ活躍してくれるとのこと。

玄関入り口の下駄箱、受付カウンターの絵（大地の玄関ドアと同じ絵柄）訪れる子どもたちは必ずここをなでってくれるそうです、一枚板のテーブルやカラ松で作った本棚など。当時、大地のカガールで連日木くずにまみれながら、必死に作った光景が思い出されました。そして、一緒に作り、一緒に研修に行っていた仲間（お話畑で妻の友人でもあった）は、これが完成後、病気で亡くなった、その悲しみも思い出させる図書館です。それらの家具も、子どもたちのお陰で、良い色を刻み、美しい歴史の色合いを見せてくれて感激でした。まさに、大地がここにも息づいてくれていると自己満足、何のゆかりもない地に、お話や絵本を通じて、思いが重なっているうれしさ、ありがたさを感じずにはられません。人が、時間と思いと歴史を刻む、その幸せ感を痛感しました。

後ろ髪を引かれる思いで、帰りの道のり約 700 キロを一気に大地まで帰り着きました。気持ちが高揚していたので、疲れもなく、大地の土を踏みしめました。暗闇、静けさ、そして匂い。やはり、共通なものがありました。その根底には、子どもたちのエネルギーがあるからでしょうか。暖かい物が流れているように感じました。

時の流れと共に、深い歴史が刻まれると同時に、忘れ去られていく現実や教訓があります。人間には、喉元過ぎれば・・・という性（さが）があります。このところの天候異常といい、人間の強欲や自然に背くような暮らしが、警鐘を与えているのかもしれない。もう一度、謙虚な暮らし、便利さ合理性を見直しながら、今生きる満足、今の暮らし、現状維持で、物質的成長曲線を求めずに暮らす知恵を求めながら、謙虚に生きて行くべきだと痛感しています。